

謎に包まれたオホーツク文化



常呂遺跡（常呂町）

北海道の北東部には、南西部とは異なる文化をもつ遺跡が見られる。特にオホーツク沿岸の地域には、縄文、続縄文、オホーツク文化、アイヌ文化まで各時代の遺跡が分布し、白滝村など内陸部では、旧石器時代の特色ある遺跡が多く見られる。

その中でも、常呂川河口遺跡は、掘り出された遺構・遺物の数量と内容において突出している。擦文文化期の竪穴・土壇墓、オホーツク文化期の竪穴住居・土壇墓、続縄文文化期の竪穴住居・土壇墓・埋甕、縄文晩期の土壇墓、さらにこれらの遺構の下層に縄文後期・中期・前期の遺構が確認され、竪穴の窪みを利用したアイヌ文化期の送り場遺構など各時期の遺構が一带で確認されている。また、1949（昭和24）年以降に調査された縄文後期の朱円周堤墓（斜里町）も、その規模の大きさを群を抜いている。

流水の見られるオホーツク沿岸を中心に、5世紀から13世紀にかけて現われ、忽然と消えた人々がいる。早くから史跡に指定されたモヨロ貝塚に代表されるオホーツク文化を残したオホーツク人である。オホーツク人は、縄文人などとは異なった人々であり、その遺跡の分布は、サハリン南部から利尻・礼文、オホーツク沿岸、根室、千島に及んでいる。

オホーツク文化の特徴を少し取り上げて見よう。漁労において、同時代の続縄文人や擦文人が